
[Sub]風邪を引いた馬鹿の陣中見舞いだありがたく思え

遠野ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「Sub」風邪を引いた馬鹿の陣中見舞いだありがたく思え

【Nコード】

N3850T

【作者名】

遠野ましろ

【あらすじ】

夏風邪がツラすぎてこんなものを。異性に見舞われましょう。

「もっと可愛いメールくれんのか」とけだるるそんな口調で招き入れた。「ひーくんラブですのー」とか」

ガチで具合が悪いのか。

後ろから浣腸されても「コマネチ」と返さないなどは。

うツ、と腰を押さえる辺り、神経感覚は鋭敏なのかもしれない。

「あがれ」

声にハリがない。顔も赤い。

「邪魔する、ぞい」

七畳の1K、布団は起きた形のままで止まっている。

スーパ-の袋をわっしやわっしや言わせながら、かかとに指を引っかけて、かたん、外す。

「冷え。タと白桃ゼリーとハイレモンとC1000とチオビタと」
喜べ、と一つを取りだして、

「貴様の大好きなホワイトロリータだっ」

デンジャラスなネーミングライツに見向きもせず。

（随分捜し歩いたのに。エリーゼの姉妹のお菓子）

ずり、ずり、と貞子ばりに重い歩きでぼてん、と布団ヘデーブダ
イブ。

絡むのもしんど、といった風情。

「お腹、空いてるか」

くるまりみのむしもんたが答える。「卵がゆが食いたい」

お安い御用だぜお嬢さん。

男の一人暮らし。米を炊くことから始まる。

卵は六個パックのを買った。残りはゆで卵にしておくか。

梅干しと、ほうれんそうのお浸しと切ったりんごと、他になにが
いいだろう。

普段は料理つけないシンク。

小分けの粉末だし、さいばし、鍋、お玉、ボウル。百均にも頼っ
て一通りは揃えた。

ついでに言うと、わたしの分の歯ぶらしもちゃんと。

一昨日の夜。

やべ。

なんか。

「……照れるわ」

一人自問。

すぴーすぴー寝息を立てるやつに背を向けてキッチンでエプロン姿で米を研ぐ自分はよっぽど真っ赤なんだと思う。

「あっち」

食べてお薬を飲んでとにかく寝ること、それが一番の近道なのだ。

「ほれ。ふーふーしてやるから」

れんげを手に、餌付けする親鳥みたく。

開く小さな口が、不謹慎にも可愛い。

額も髪も、汗ぐっしょり。

残るは熱だけだと言っていた。いっぺん風呂入って一晩眠ればよくなるだろう。

なんか、ほっとした。

本当は会いたかったんだけど。

とは言えない、可愛くない自分。

「帰んの？」

肩まで掛け布団引つ張つてると、訊かれた。

「うーん。親父殿がな……」

門限はいまどき七時。バイト以外のおでかけにはやかましい。

曰く、吉永小百合ばりの忘れ形見なのだ、お父さんは心配症なのも割り切つてはいる。名前しか被らないのも割り切つてはいる。

「……そか」起こしかけた身を引つ込める姿に、

「寂しいか」

「ん」

捨てられた子犬の目に素直に認められると。

後ろ髪を引かれないはずがなく。

「ごそつ、と捲つて。」

もそつ、と潜ると。

ふわっ、と抱きつく。

べちゃ、と貼りつく。

「汗くさー」

「うるせー」

シートも全般男くさいんだよとにかく。

まーもスカートしわになるけど背に腹は変えられない。

「ところで」頬にびたりと、超熱い手。「治ってよかったねえ、さ
ゆりちゃん」

ぐ。「ま、まあな」

「ここ、ごほごほ言ってる」首筋をなぞる、指先。「どうだろう、
俺がこんななった理由に思い当たるところはないかい」

「さああ?」

「心は痛まんのかいな」

「貴様。詰問するためにわたしをおびき寄せたのか」

「うにゃ」ゆるく首を振る。

「甘えさせて」

あーまったく。

異様に高い体温が。

この五月に、布越しに暑っ苦しいからだが。

頭に手を回されてロックオン。

安心して瞼を下ろされてしまつては。

ゆだねるほか、ないではないか。

今宵の月。つるピカハゲ丸殿がガミガミがなる構図が目に見え、酔っぱらう頭痛よりもアタマが痛い。

さて、誰の家に泊まることにしてシノぐ。知らない子がいいな、と。亜由美は駄目だ、あいつは口が軽い。里佳か薫か、架空を持ち入れない真面目な性分は誰なんだか。

「一番の障壁はおやっさん、だよな」

ん？ 「なんか言ったか」

「一緒になんなら」

ブフォツと火い噴いたこつちをさておいて、「むに」と容赦なく埋めてくる。

鼓動に近い部分を拾われて、深く母性を刺激される。

「なあ」すこし癖のある髪を撫でてやる。「壁は超えるためにあるんだぞ」

「一人じゃー寝れない、ずっと」

すりすり、と擦ってくる、こいつは。

「甘ったれが」

「悪いのか」

目を閉じて、同じリズムに身を落とす。許容。受容。寛容。

「いや、全然」

むしろ……、

触れさす頬と頬。長いまつげ。無防備に口開いたまま、浅い熱い呼吸。

ラヴ以外になにがあるんだ。

のび太ばりにさくつと寝るもんだから、ひーくん、と優しく抱きしめて言ってみる。

「貴様のことがすごく、好きなんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3850t/>

[Sub]風邪を引いた馬鹿の陣中見舞いだありがたく思え

2011年5月23日13時45分発行